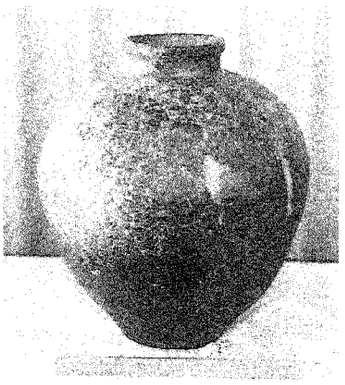
ふるさとの文化財散歩

六月は梅雨の季節を迎えて、雨の日が多くなります。今回は、雨の日にも訪ねることのできる二つの文化財をとりあげました。

歴史のロマンを秘めた室町時代の大きな壺と、雨と菖蒲の似合う石橋を訪ねてみてはいかがでしょうか。

灰釉梅花大壺

市指定有形文化財第二号



今から二十四年前の昭和四十一年九月十日、赤坂駅前の水道工事の際、道路の地下二十三センチメートルより、底を上に向けた逆さの状態で完全なまま出土され、発見者などのご好意により、昭和四十六年に都留市に寄贈されて、現在は都留市立図書館に展示されています。東京国立博物館の鑑定によると常滑焼で室町時代（一三九二～一五七三）の末期に焼かれたものと推定され、その当時、酒や水、穀物を入れるための雑器として使用されたものですが、この壺ほどの美しさをもったものは比類が無いとも言われています。

壺の表面には焼成中に自然に付いた白い灰の釉が美しく見られ、肩のところには梅の花びらの窯印が付けられています。

この壺が、どのような経過で土の中に埋もれたのか不明ですが、室町時代にこのような壺を所有することは容易なことではなく、おそらく有力な一族の生活がこの付近にあったと想像されます。

茶色の荒い土の焼きと、白い自然の灰釉とのコントラストや、丸みからくる素朴な味わいの中にすばらしい美しさをみつけることができます。

寸法　高さ　42・8cm
　　口径　13・8cm
　　胴直径　45cm

元坂の石橋

市指定有形文化財第十一号

この石橋は秋元公時代（一六三三～一七〇四）に家中川へ架けられていた五石橋のひとつで、築造の年代は明らかではありませんが、風雪に耐えた石の肌が昔を偲ばせています。石柱を橋脚にして上に石の板を置いただけの簡単な工法ですが、大正十二年（一九二三）の関東大震災の時にも崩れない程のものです。昭和になって橋の幅が狭いために、つぎつぎと取り壊されてしまい、現在の谷村工業高校の南側、上谷元坂に通じる所にあったものが中央三丁目の円通院の放生池に移築復元されています。

五石橋とは家中川の五ヵ所に架かっていたので、その名前があります。その場所は陣門（上谷四丁目）、滑岩（中央一丁目）、源生（中央一丁目）、深泉院（下谷一丁目）、元坂（上谷五丁目）の五つと伝承されています。

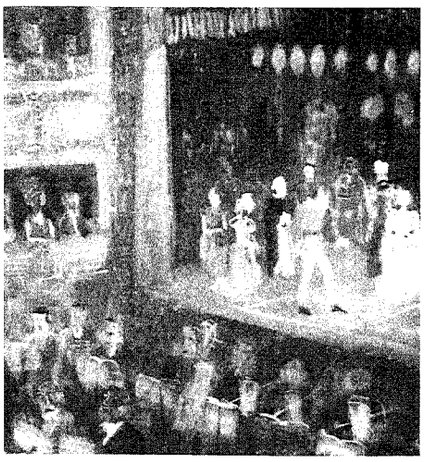
寸法　長さ　6m96cm
　　幅　1m20cm

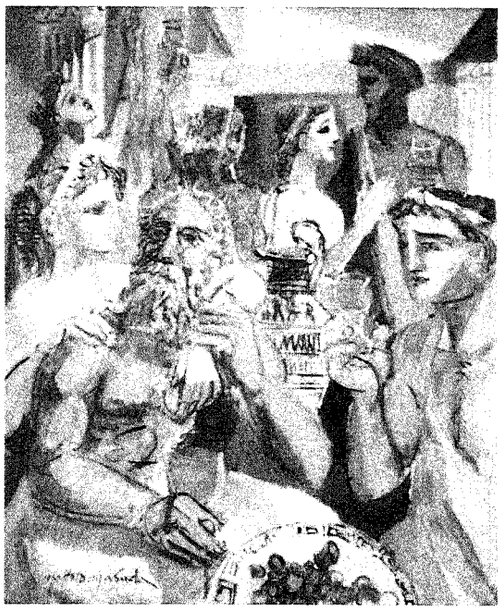
故増田誠画伯の絵画紹介

「SANTI・キャンパスタウン都留」（美との出あいの郷）事業の一環として平成元年度予算で購入した作品です。

この作品は、ご家族のご好意により、公的美術館のみに提供する作品のなかから、当市のために特別に選定していただいたもので、市制三十六周年を記念して、四月二十九日の式典当日、文化会館で公開展示されました。

『ロミオとジュリエット』





『オリンポスの饗宴』